



金史良全集

IV

河出書房新社

金史良全集 IV

昭和48年4月30日 初版発行

¥ 1200

編 者 金史良全集編集委員会

発行者 中 島 隆 之

発行所 株式会社 河 出 書 房 新 社

東京都千代田区神田小川町3-6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)

振替口座 東 京 1 0 8 0 2

©1973

0398-414104-0961

印刷・暁印刷 製本・中西製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします

目次

評論

朝鮮文學風月録……………	9
朝鮮の作家を語る……………	17
朝鮮文化通信……………	21
ドイツの愛国文学……………	31
ドイツと大戦文学……………	36
朝鮮文学側面観……………	41
エッセー……………	
雑音……………	53
安宇植 訳……………	
尹学準 訳……………	

エナメル靴の捕虜……………55

玄海灘密航……………59

故郷を想ふ……………62

ナルパラム……………65

小説集跋文（光の中に・故郷・風霜）……………67

詩

奪はれの詩……………73

紀行

火田地帯を行く……………79

書簡

一九三六年十二月～一九四二年一月……………

93

ルポルタージュ

海軍行……………長璋吉 訳

117

驚馬万里……………安宇植 訳

132

海がみえる……………金達寿 訳

315

智異山遊撃地帯をゆく……………

360

解題……………安宇植

367

年譜……………

383

金史良全集

Ⅳ

凡 例

- 一 本巻の本文校訂は安宇楨が担当した。
- 一 日本語による作品は原文のまま収録したが、校訂者が若干の改訂を施した。また現在の読者のために、ルビと注を付した。
- 一 注は原注と思われるものは8ポ、校訂者による短い注は6ポの割注で、それぞれ（ ）内に入れ、長い注は本文中に（二）（二）の番号を付し、各作品末尾に出した。

評

論

朝鮮文學風月錄

一 偉大な作家出でよ

言語の問題からして朝鮮文學は今こそ受難期と云はれてゐる。だがわれわれはこの問題に際して左程神經質にならなくてもいいと思ふ。あらゆる言語學者や民族心理學者の證言をかりるまでもなく、民族語の將來についてとやかく悲觀するのはあたらないからである。支那漢學の頑冥のもとにゐた幾世紀の間をも、それなりにわれわれは今まで尙白い着物と自分の言語を守つて來た。それは寧ろ本能であつた。それに殆んどわれわれが文盲で、文化參與者といふのが政治機構内にゐる極く少數の者に限られてゐたといふ事情が、民衆には大きな影響を與へなかつたのである。今日はわれわれの八割が文盲である。義務教育もほどこされてゐないわれわれの土地において、二三時間もすれば優に習得の出来る朝鮮正音を禁止して、それにかへるにいきなり内地語(日本語以下同じ)をもつてしても無益であり、又このやうなことは文化を愛する所以のものではない。數百年の間ロシアやドイツの支配のもとにあつ

たポーランドの言語や、イングランドの徹底的影響下のアイerlandスラングが今尙民衆語として伸張してゐるのを顧るだけでも、思ひ半ばするものがあらう。一時、朝鮮では「知るが力、學んでこそ生きる」といふ文字普及のブナロード運動が盛んだつた。それがどんなに多くの文盲に光を與へたことであつたらうか。民衆は最も必要ですぐに役立つものをつも欲する。今その運動は色々な事情で阻まれてゐる。朝鮮文化は又十年なり二十年なり停滯するやうになつた。多くの小學や中學では校内や家庭において朝鮮語や朝鮮服の使用を嚴禁してゐるやうである。かうなれば實際悉く學校を東京あたりにもつて行くがいいだらう。

だがかういふ言語の受難から朝鮮文學の將來性があやぶまれると思ふのは早斷である。こんな時にこそ偉大な文學が生れるであらう。朝鮮の民衆は讀み易いものならば何でも讀むことを欲し、朝鮮の作家はそれを與へんことを企ててゐる。十七八世紀頃フランス文化の浸透の中において、ドイツではクロツプシュツクも生れレッツシングもゲーテも生れた。これから朝鮮にも朝鮮語と朝鮮文學を基礎付けるやうなゲーテが生れるであらう。そして現在がその生れる時期であるし、また生れねばならないと私は常々考へてゐる。近頃の進作家たちの作品を讀めば、以前の言葉の藝術性に無頓着であつ

た左翼文學の反動として、極度な言語感覺の研磨^{リツメイ}がなされてゐる。それで新しい言葉も澤山發見されてゐるやうだが、惡く云へば朝鮮語をますます混亂せしめてゐるやうである。ゲーテは獨逸語^{ドイツ語}を新しく發見し廣めたばかりでなくそれを整理したとも云へる。これからの朝鮮の作家は朝鮮語を整理するといふ課題の前に何よりも眞摯でなければならぬと思ふ。出版屋の話に依れば、とみに朝鮮では出版物の賣行が好調を來たしはじめたと云つてゐる。けれども、われわれは現象的に出版の好成績のみをもつて樂觀する輕卒はやめねばならない。といふのは、この傾向はたしか一時的なもので、五年も續きはしないであらう。殊に今の小學生や中學生が社會人になつて、讀者層を構成するやうになることを豫想すれば、暗然たるものを覺えはしまいか。將來の文化層を形成するものは、少くとも朝鮮語や朝鮮語の書物を讀む力と習慣に殆んど缺けてゐる者たちではなからうか。

二 内地語では書けない

われわれは朝鮮文化を愛するからこそ、この際いろいろと考へねばならないのである。そして朝鮮文化を守ることからはじめて、全日本の文化にもプラスを與へうといふことを

われわれは確信してゐる。當局者もこのことを反省してもらひたいのである。廣く云へば、朝鮮文化の獨自性を保持することは日本文化はおろか東洋文化のためでもあり、世界文化のためでもある。このことは、いくらわれわれが主張しても主張しすぎるといふことはない。われわれはかういふ深い信念のもとに、その方向に對して一貫した文化意志をもつて動かねばならない。時勢に乗ぜられるといふことでもないが、現象的なことにのみ拘泥^{クニ}して大局を誤まつては、朝鮮文化のために非常に悲しむべきことではなからうか。このことに關しては、ほんたうに朝鮮文化を憂ふの念をもつて、眞摯な態度で意見を交すべきであらう。その一つの試みとしては張赫宙氏の「訴狀」^(一)（文藝二月號）も極めて思ひ切つた所論として注目される。それは大體、文學界の正月號にのつてゐる朝鮮文化座談會^(二)の中における林房雄氏の意見と同じいもので、朝鮮語はぢきに滅びるに違ひないから、今のうちから朝鮮語で書くやうなことを止めて、内地語で書くやうにしなければならぬといふことである。しかしこれは實際の問題として出來ない相談と思ふ。われわれは朝鮮語の感覺でのみ、うれしさを知り悲しみを覺え、怒りを感じて來た。勿論われわれの一部の者は内地語で自分の意志發表は出來るであらう。しかし感覺や感情の表現は出來ない。私は今まで曾つて感覺と

感情を無視した所に文學があるといふことを知らない。このことは私との談話の際にも張氏自身認めてゐたやうでもある。

内地語で書くべきであらうか？ 勿論書ける人は書いていい。だがわざわざあらゆる犠牲を拂つて内地語で書きものをするといふ場合には、その當人に非常に積極的な動機がなければならぬと思ふ。朝鮮の文化や生活や人間をもつとひろい内地(和)の讀者層へ訴へ出るといふ動機。又謙遜な意味で云へば、引いては朝鮮文化を東洋や世界へひろめるためにその仲介者の勞をとりたいといふ動機。この貴いものがなければ、自分の言葉と話しかけるべき廣い讀者をもちながら、それをすててわざわざ書きにくい内地語で書かうとする必要が今のところどこにあらうか。この限りにおいて、私ははじめから張赫宙氏を認めようとしなかつた朝鮮文壇の狹量を不當とするものである。だがほんたうのことを云へば、やはり朝鮮の作家は自分の讀者層のために立派な自分の言葉で書くべきであり又書かなくてはならない。若しも作家が自分の言葉を捨て、讀者層からはなれるといふなら、それこそ朝鮮文化は三千年の歴史を停止するといふものであらう。この點、東京文化人も眞面目に考へて貰ひたいのである。朝鮮には朝鮮文字しか讀めない民衆が何百萬もある。朝鮮の文化をもとの沙漠へ葬らうとするやうな考へをどうか回収して貰はうでは

ないか。

そのかはりわれわれはいろいろと今の時に言語の問題について具體的なことを考へねばならないと思ふ。それをことさらに避けて問題にしないと云ふふうな態度を取るのは却つて卑怯である。

三 正音と漢字

私の考へに依れば現在朝鮮語で書かれてゐる作品は、少年達や官學の教育を受けた人達に讀ませると一樣にあまり讀みづらいといふことである。われらの言葉そのものの優秀性は決して讀みづらい所にはない。作家が讀みづらく書いてゐるのである。甚しい所、新心理文學の亞流になると、句讀點もなしに奇妙な言葉をこね上げて不様に書き連ねるので、外見は何だかサンスクリットを見るやうで印象が全然ひびいて來ない。勿論私はこの一派の作品を認めぬ譯ではない。だが讀まれないことを憤らずに、先づ第一に廣く讀まれるやうに工夫すべきではないだらうか。作品は何よりも讀者をもつことを必要とする。私の如きは小學校から大學まで官立をやつてゐるから、いい標本であるが、いくら善意になつて讀まうとしてもこの亞流たちの文章は一頁も讀んではゐられない。

そんな善意などいらないと大きなことを云つて出るかもしれないが。——現在朝鮮には語學會や語學研究會とかいふいろいろな權威のある團體があつて濟々多士活動しておられる。この方たちからでも早く亂麻の中にある言葉の統一を計つて

もらひたい。そして作家達も大したことの無い限り、文法上の活用や變化をやぶらぬやうに心がけたいものである。それは離れるばかりの讀者を喰ひ止める一策でもあると思ふ。現に作品の中では實際ありもしないやうな言葉も澤山使はれてゐるやうであるし、又作者自身さへはつきりしたイメージももたないやうな言葉がまちつて、殊更に讀みづらくさせてゐる。私はそのことを現在のある秀れた新進作家の作品を翻譯しようとした場合に、先づ痛切に感じたことである。どこの國の文學史上においてもかういふ一時期はあつた。文學史的に云へば、朝鮮文學の初創期において新しく朝鮮正音文學を樹立した李光洙、廉尙燮（想涉）氏等は、正に朝鮮のクロツプシュトックでありレッシングである。しかし今はゲートルが生れ出ねばならない。朝鮮語文字に正統的な基盤を與へるやうな、言葉の藝術を獲得した朝鮮のゲートルが。さうでなければ言葉はまだしも、それこそ朝鮮文學が最大の危機に處してゐると云はねばなるまい。現在朝鮮語は何よりも統一整理されることを必要とし、そしてそれが偉大な作家によつて藝術

的に形象化されんことを欲してゐる。

更に私はここにもう一つ勇氣をもつて提唱することであるが、讀む人に理解を遠からしめないやうな語句である限りは漢字をも交へて書くべきではないか。このことは作家たちも出版業者も又語學研究者も反對のやうであるが、しかしわれわれ文筆を業とするものは讀者に便宜を與へるといふことを少しも考へないでいいであらうか。事實漢字を一語も交へずに正音ばかりで書き連ねた文章を何頁も讀むことは苦痛であるし、それに印象も鮮明に受けられない。私はある時自分の讀んだ書物を參考しようとして、後からその句節のありかを探すために小半時間も費したことがある。もしも漢字でも交へてあるならば、語象からくる感覺でもつて充分助けられるものがあつたであらう。このことはほんのつまらない一例に過ぎない。われわれはかういふ危機に際して、こんなことを議論してみないでいいことではない。そのことがわれわれの讀者を遠ざけることに誰も氣付いてゐないのだらうか。私はいろいろな意見や批判を大方に期待するものである。成程今までの私達の正音文學はそれでよかつた。それには充分の理由があつたからである。それは三十年前まで漢字の重壓の下にあつたわれわれが、自分の獨自の言葉の文學を樹立しようとした爲の一つの現はれである。しかしもう漢字の幾らかは

われわれのものになつてゐるではないか。しかも漢語から由來して既に朝鮮語となつた言葉を書く場合でも、作家に依つてはまちまちの讀み方で書いてゐるのである。勿論作者は語調とか文章の流れからさういふことになるに違ひない。しかし讀者には迷惑千萬である。私がここで例を挙げなければ、親愛なるわれらの作家は理解の出来ない程、そんなに讀者のことを何一つ考へてゐなかつたであらうか。東京文壇では山本有三氏が提唱してなるべくむづかしい漢字は避け、わかりきつた言葉は假名でうつすべきだと云はれてゐる。われわれは今丁度その反對のことをしていいと思ふ。

このことの他にもいろんな議論すべきことが多いものと思ふ。われわれは今如何にしてもつと廣くの讀者層を擴大すべきであるかを、題材や内容との結びつきにおいて考へるべきは勿論であるが、それにも劣らずに重大なのは正言文學の形象自體の中にも前述のやうになは考へる餘地がありはしないだらうかと云ふことである。

四 題材と内容

朝鮮の新文學は、僅か三十年の歴史しかもつてゐない。今から考へれば、最近の朝鮮文學史は、恐らく三つの段階に區

別して考へられるべきと思ふ。所謂初期とも云ふべき、李光洙や廉尙燮の時代は彼等が東京留學において、日本の新文化や文學運動に刺戟されて、郷里に歸つて新しく朝鮮正言文學を起したことから始まる。彼等にはその當時、何よりも文化と文學に對する灼きつくやうな情熱があつた。それが彼等の文學を作つた。だが漸く新文學も一通りの素地を作らうとしてゐる際に、滔々（たうたう）と社會主義思潮が押し寄せて、纖弱な文學的基盤をふみつぶしてしまつた。このせつかちな社會主義文學は朝鮮文學の芽を喰ひつくした毒素であつたことを否めない。我等は數人の社會主義文學者さへ持たなかつた。もつたのは悉く社會主義御用代書人だけだつた。それは、彼等がやうやく育て上げられつつある新文學藝術を踏みにぢることから出發したのであつて、それを自分の骨肉にとはさうとはしなかつたからである。

現在は、丁度その反動期とも云へる。猫も杓子も藝術の神様に取憑かれてゐるといふよりも、そんなふうなことを言ひふらしてゐる。だが彼等に致命的なのは、第一期の文學者におけるやうな情熱のどよめきがない。ヴィナスを眺める眼が霞んでゐるやうに見受けられるのはどうしたことであらう。もはや朝鮮の文學する人々は、生活や困苦の前に旗を卷き始めたのであるか。それに、この地の文學者が疲れ果てねば

ならないものを、時代や社會は與へてゐるのであらうか。しかしこれは杞憂のやうである。これから新しく起りつつある最近の文學層は、今までの一期二期の文學を揚棄するやうな方向を取つてゐるやうである。われわれは悲しむに當らないであらう。だが、私は先の漢字の問題と同じやうに、ここに敢て忠言のつもりで述べるのは、われわれは今までの題材や内容を擴張することから、文學を更に始めねばならないといふことである。第一期の文學者はよく情熱文學を作り（今では技巧で生命をつないでゐるが）、第二期の文學者は放火の文學を作り（今は筆を投げ）、現在の文學者は自己辯護の文學をやつてゐたのである。これから始まる文學はこれ等のどの様相からも自由にならなければならぬと思ふ。その意味では私は金南天氏の自己告發文學を、現在の文學主義から離脱する一方便として注目してゐる。三文の價値もない連中が、自分は文學の神に取り憑かれてゐるといふことを楯にして、自己を守らうとしたり、貧民窟の生活に、センチな同情の念を寄せて悲劇文學を書いてみたりすることから、われわれは、一應足を洗はねばならない。私は新進として名をうつて出た作家の處女作が貧民窟作品でなかつたことを知らないし、又彼等が文壇に出てから自己を偉く評價してみせようとしなかつた例を覺えてゐない。われわれはこれから人生の觀察にも、

もつと冷徹な目を向けねばならないであらう。そして自己に對しても嚴酷であらねばならない。一時リアリズムの問題が盛んに論議された時、相當な文學者もそれを自然主義や素朴な寫實主義と混同して、しかも得たり顔でゐたやうだが、どうしてこのリアリズムが、我等の前に書くべき更に廣い分野を與へてくれたことに對して敬意を表しようとしなにか。我等の文學では、貧しい寡婦は必ず善良であるべきだつた。傭人は必ずしまひには主家に火を放つべきだつた。村の女は必ず農場監督に強姦されるべきだつた。重役は肥つてゐるべきだつた。こんなに朝鮮には幾種類の人間しかゐないのだから。これからは鋭く、廣く目を向けてもつと深くそれ等の真相を掴まうではないか。我等は一人の官吏の生活をも書かうとはしなかつた。人間を探究しようとするわれわれが、朝鮮民衆の生活と密接な關係にある官吏の人間性をも、今までのやうな公式主義をはなれては書かうともしなかつたことに對して、恥ぢなくてもいいであらうか。作家はそんなに幼稚でお安くていいのであらうか。

われわれは新しい題材と内容をこれから掴まねばならない。

五 翻譯クラブ